歳末

筑駒電子書籍文庫

shounou8

◇

風が気持ちいい。
「あーああー、さーむーいー」
ベンチに腰掛けたまま、私はアホみたいに寒い寒いと繰り返す。もう何もしたくない。いっそこのまま自由だ！とかなんとか叫んでやりたいが今の時点で相当に目線が厳しいのでやめておく。無職に対する世間の風当たりの強さを感じる。そんな目線もどこ吹く風と昼からカップ酒を呷るおじさま方を見てああはなれないと感じる。なれないというかならないというか、それ以前の問題でなれない。為すがまま。
それにしても天気がいい。吸い込まれそうな空、とかいう表現はよく目にするけれど、わりとそんな感じなのかも知れない。雲一つ無い。文句なしの快晴。猫に話し掛けたら無視された。猫撫で声を出せる人間の気が知れない。うらやましい。
とか惚けていると、急に影が差した。後ろに誰か立ったようだ。ついに職務質問か、まあこんな日に三時間も公園でぼさっとしているのがいたら通報されてもしょうがない、私だってそうする。お疲れ様です、とか思いつつも見上げると、
「あ、」「はろー、井ノ原」「店長？」
この前辞めた喫茶店の店長だった。
ただし、死に装束を纏っている。
「え、あれ、店長どうしたんですその格好」「よくぞ気づいたな、私こそが幽霊だ」「いやまだ私何も言ってない。あとそのしゃべり方は変なんで止めてください」「あしらいが冷たい……バイトのあしらいが冷たい……」「元バイト、です」振りかざした手がすり抜ける。本当に幽霊らしい。……幽霊って、なんだよ。……なんだこいつ、何がしたいんだよこいつ。良く、頭が回らない。
「ていうかなんなんですか、マジで」
「知り合いの顔見たらさぁ、とりあえず声かけるのは普通じゃん？」
「状況が普通じゃないです。本当、出し抜けになんなんですか、死んでる人が、急に、何したいんですか」
「そんなこと言われても。私も何したらいいかわからねーんだよ」
「……はあ、」
何も考えていないような顔でそんなことを言い放たれたので、なんだが気が抜けてしまった。本当に何がしたいんだろうか。
店長の姿を改めて見ると、なんだか幽霊らしくない。足はある。薄暗い程度だけど影もある。思っているのと違う。さっき手がすり抜けたから幽霊なのは本当だろうけど、本当に雰囲気というかなんというか、幽霊らしくない。悲劇性の欠片も感じられない。
「なんか失礼なこと考えてない？」
「根拠のない唐突な超存在的アピールやめてください。とりあえず成仏でもします？良いお坊さ

ん紹介しますよ」
「やめてよ。私だってもう少し現世に居着きたい気持ちはあるし」
「居着くって。どこに居着くつもりなんですか」
「君ん家とかさ」
「やめてください、意味がわかりません。実家とか友達の家とか行けばいいじゃないですか、なんでしがないバイトの家に留まろうとするんですか」
「私もそうしようとは思ったんだけどね。親交が深かったやつが幽霊になって出るとさ、精神的に負担が大きいじゃない？君なら中途半端に浅い仲だし同性だし、こう、座敷童的ポジションに落ち着けそうだと思ったんだよ」
「そんな縁起のいいもんじゃないでしょう」
「迷惑はかけないからさ。いるだけ。いいでしょ」
　相手をするのが面倒になってきた。そもそも家に帰っても誰もいないのだ、どうでもいい知り合いがいたら話し相手くらいにはなるのかも知れない。
「……良いですよ」
「どうも。じゃあ初詣に行こう」
「なんでですか」
「だってこんなに晴れてるんだぜ。行かないとお天道様に失礼だ、どうせ君もまだ行ってないでしょ、彼氏とかいないんだろへいへーいばーかばーか」
「店長だってどうせ彼氏いたことないでしょううるさいな……まあ行きますか」
「行こうか」
「もう五日ですけどね」

　◇

「バレンタインだね！」
「存在意義を失って成仏したいんですか？あんた誰にも渡せないでしょう」
「それもそうだ」
　店長が居着いて一月経つ。帰ってきて誰かがいるという環境は意外と良い物で、独身者がペットを飼い始める理由はここにあるのかも知れない。
「というかなんでそんなにテンションが高いんですか」
「テンションは制御できないからテンションなんだよ知らないの？馬鹿なの？」
「馬鹿はてめえだ、あんまり調子乗ってると叩き出しますよ」
「反省する」
「おう」
　鷹揚に頷いたものの、今日は暇だ。どうしようか。
「どこか出かけようか？」
「とりあえず人の思考を読むのはやめろ」

「うへい」
　でも、どこかに出かけるのはいいのかもしれない。今日明日はバイトもないし、家でごろごろしていても脳味噌が腐るだけだ。
「豆買いに行こう」
「節分もう終わったでしょう」
「だってやってないじゃん。鬼が入ってきて福が出て行くよ、豆撒こうよ」
「すでに霊入ってるから鬼とか入る余地無いんじゃないですか？」
「でも福を招き入れる必要はあるでしょ。行こうよ三越。せっかくだからいい豆買おう」
「私の金ですよ」

　◇

「寒い」
「寒いですね」
「クソ寒い」
「なにせ冬真っ盛りの朝っぱらですからね。というか冷感あるんですか」
「気分だよ」
「はあ」
　茨城県は水戸市の偕楽園に来ている。ここに植わっている梅の木は約三千本。品種は興味が無いので調べていない。
「ていうか店長、梅とか見るんですか」
「一回も見たこと無いよ」
「じゃあなんで六時に来ようとするほどモチベーションが高いんですか」
「そこはほら、私菅原道真の生まれ変わりだからさ……」
「性別が違うでしょう。なんとなくなんですね？」
「まあ、そうなるかなー」
「それに付き合わされる身にもなってください。めっちゃ早起きしたんですよ」
「月に一回くらいならわがままを聞いてくれるって言ったのは君じゃん」
「あれは豆の品種で店長があり得ないほど粘ったからでしょう。結局高いやつ買ったし」
「良いでしょ、常日頃が尋常じゃないほど暇なんだから」
「じゃあ成仏でもどうですか」
「死んでもやだね」

　◇

「桜は日本人の心だよね」
「近所の桜なんか見てどうするってんですか」

「火事とナントカは江戸の華って言うでしょ」
「火事と喧嘩は江戸の華、です。それ花見全然関係ないですし」
「良いんだよ。花見は日本人の心とか偉い人はみんな言ってるでしょ」
「意味わかんないです。さっきと同じようなことを言っている点も含めて意味不明です」
「私もわからんな全く」
「それで良いんですか」
「良かろ」
　酒盛りしている連中が多い中、一人で弁当食べてる女とか情景として嫌すぎる。もう帰りたいが店長にその気は無さそうだ。完全に嫌がらせとしか思えない。コンビニ弁当なんて食ったのは久しぶりだ。相変わらず漬け物がまずい。
　その店長だが今は静かだ。おとなしく桜を見ている。私がここにいる必要ないんじゃないかな、とか思ったがなんだかんだ店長は一人で外出をした事が無い。
「よし、帰ろう」
「気が済んだんですか」
「済んだ」
「じゃあごみ捨ててきますね」

　◇

「めーい」
「でー」
「端午の節句って何するの？」
「知りませんよ。店長は知らないんですか？」
「子どもも男兄弟もいないからわかんないね。なんか菖蒲とか買えば良いんじゃないの」
　スギ花粉の残党が鬱陶しい時期になった。ピークを過ぎたとはいえ依然健在な日は健在であり、こうしてたまに襲ってくる。マスクをし忘れると悲惨だ。
　というか今は夕飯を作っているのだからあまり話し掛けないで欲しい。頻繁には料理をしないので集中しないとカレーすら厳しくなるのが虚しい。カレーには林檎を入れるのが一応ハウスルールになっている。
「どこに売ってるんですかそんなもん」
「じゃあ鯉のぼりで妥協するよ」
「そんぐらいなら買ってきますからちょっと待っててください」
「ちまきもよろしく」

　◇

「バケツひっくり返したみたいだね」

「そうですね」
「外、出られないよねこれ」
「出る用事も無いですけどね」
　居間でテレビを見ながら外を眺めている。梅雨の雨はやはり凄まじいものがある。外出など出来たものではないだろう。じめっぽさは好きではないが雨の音は嫌いではない。しとしととした音は趣があるみたいで好きだし、激しい雨の時のザーッ、と言う音も好きだ。弱い雨なら傘なしで打たれるのも良い感触がする。
「六月は祝日が無いのが致命的な弱点だよね」
「八月も山の日出来ましたからね」
「裏切りとかちょっと許されないんだけど」
「裏切りって何ですか……」
「私は六月生まれなんだよ」
「私もです」
「じゃあ誕生日パーティーをやろう」
「ケーキ無いですよ」
「気分だけで良いよ」
「わかりました」

　◇

「暑い」
「はあ」
「暑いんだよ」
「当然です」
「にしても暑いでしょ、ちょっと早くない暑くなるの」
　確かに今年は少し気温が上がるのが早いかも知れない。まだ八月にはほど遠いというのにこの気候と気分の噛み合わなさは筆舌に尽くしがたく直訳すると死ぬ。せめて扇風機くらいは出しておくべきかと思ったら壊れていた。無念。
「ということで買いに行こうよ扇風機」
「この暑いのに外出したくないです」
「外も中も暑いだろ。ていうか、電器屋なら冷房とか利いててむしろ涼しいじゃん、この暑さのループから抜け出すには扇風機を買いに行くしかないんだよ」
「金がないです」
「嘘吐け、この前かき氷器衝動買いしてただろ」
「思い出しました、じゃああれで涼しくなれば良いじゃないですか」
「私は食えないよ」
「なのに暑がれるんですよね」

「うん、マジで意味不明だ」

◇

「軽井沢はなんかこう、なめてるよね」
「何をですか」
「夏という存在をなめてる。どんだけ涼しいんだよここ天国か？」
「そのために来てるんでしょう。金無くて一泊だけですけどね」
「少々寂しいね」
　というか行き帰りにだいぶ時間を使っていることを考えるとコストに対するリターンが釣り合わない気がしたので考えるのを止めた。私は今石だ。やった。石は違うな。思考停止の脳無し野郎が訂正なんてするのもおこがましいが今の私は透明な存在だ。眠い。
　布団に身を投げ出す。一泊のくせにキングサイズのベッドの部屋を頼むのは死ぬほど恥ずかしかった。視線がいたたまれなかった。その分くつろいでやろうと、店長の分のスペースまで奪う。
「あっやめろお前」
「あなたがキングサイズがいいとか駄々こねるから余計に金かかったじゃないですか。このくらい使わせてくれてもいいでしょう」
「まあいいけど」
「いいのかよ」

◇

「中秋の名月だよ！」
「月見ですか」
「そうそう、団子買ってきて」
「なしで良いじゃないですか」
「雰囲気が出ない」
「幽霊いるだけで雰囲気出てますって」
「月見の雰囲気の話してるんだよ」
　最近は割と涼しくなってきた。残暑も気持ちの良い去り方をしていって、本当に素晴らしいことだと思う。へばりつくような残暑がこの世で一番嫌いで呪うレベルだ。
　中秋の名月、十五夜の月は必ずしも満月とは一致しないらしく、少しだけ欠けている。欠けているとは言うものの、月の形状だとどちらかというと削れている、とか言った方がいいような気がするがどうなんだろうか。
「何の模様に見える？」
「普通にウサギに見えます」

「私もだね。二人そろって目ェ狂ってんじゃねぇの、月にウサギがいるわけねーだろ」
「じゃあ、他に何がいるってんですか」
「知ったこっちゃないよ」

◇

ハロウィーンに大人が積極的に行動する隙は無い。
今回は店長は家で寝込んでいる。幽霊が寝込むってどういうことだ。相変わらず透けてはいるのだが彼女は本当に死んでいるのだろうか。
街はイルミネーションであふれている。ハロウィーンが過ぎたら、クリスマスのイルミネーションに移行するのだろう。
ジャック・オー・ランタン。確か地獄にも天国にも行けなくなってしまった男が、悪魔に哀れまれて灯をもらった、という話だった。ペテロさんだっけ。そろそろ許してやれば良いのに。
店長も似たようなことかと思ったが、奴は猶予を楽しんでいるだけで彼とは事情が違う。そんな事よりカボチャだ、毎年ハロウィーンの夜にはカボチャを丸ごと一個煮物にしないと気が済まない。イルミネーションなんてものには目もくれず家へ向かった。

◇

「紅葉狩りに行こう」
「どこへですか」
「近所で」
「楽でよろしい。ようやく足るを知ってきた感じですね」
「そんな事言われてもあんまり喜べないなあ」
「まあそんな事言わずに。喜んでくださいな」
最近はむしろ冷えてきた。こたつを出すにはまだ早いのだが、夜や朝が厳しいことがある。外出時にもホッカイロがあった方が良い季節になってきたので、あと二三度平均気温が下がったらこたつを出してしまおうかと考えている。何よりもこの時期は風が強い。
ところで冬は魚がうまい。春だろうが夏だろうが秋だろうがうまいことはうまいが冬の方が魚はうまい物だと信仰している。脂は正義、卵は救い。生存戦略の流れに乗ろう。
「だから、散る前に行っちゃおうよ」
「散った後でもそれはそれでいいんじゃないですか」
「私は散る前のが見たいんだ」
「……わかりました。出かけましょうか」

◇

　目が覚めた。
　石狩鍋を食ってついでに酒を飲んで、呑んだくれた事までは覚えている。
「頭痛い……」
　水を飲む。今日はクリスマスだ。女一人でケーキ買うとか死んでも死にきれないので複数人分の材料と土鍋を買って石狩鍋とした。鍋は一回作れば加熱したりするだけでそこそこ間が保つし転用も出来るので本当に楽だ。もやしが特に好きだ。本来の石狩鍋で入れるかどうかはわからないのだが好きだ。味がしみているのと食感が好きだ。糸こんにゃくの次ぐらいに好きでついつい入れすぎてしまう。
　というか店長はどこに行った。
　どこを探してもいないし、軽く呼びかけても返事がない。外出しているのかと待っていても一向に来る気配がない。そこで一回意識が軽く飛んだ。
　夢を見た。が、浅い眠りゆえに内容は頭に残らなかった。
　もう一回目を覚ました時も、店長はどこにもいなかった。
「成仏したのか」
　するなら事前に言ってくれればいいお坊さん、本当に呼んだというのに。
　食卓を見ると、シメに買っておいたうどんがなくなっていた。店長が持って行ったのだろうか。土産としては幾分軽すぎるのではないかと思案しながら、最後の缶ビールを開けた。炭酸が抜けている。